深淵の地

第一稿

KANO MATILDA

2024/12/10

【登場人物】

・男

・トランス・ジェンダー女

・天使

1○深淵の地ー昼

深海のように深い青色の、雲ひとつない青空が広がっている。ここは荒涼した海辺町である。小石だらけの地面には、うつ伏せで何年も眠り続けたような草が生えており、あたりにポツン、ポツンと点在する小さな木造の建物は、どれも永く潮風に晒されたため、日焼け後の剥け始めた肌のようだ。地面に目を向けると、暇を持て余したようにのろのろと動く、小さな蟹を見留めることができる。小石だらけの波打ち際には、人の気配が一切感じられず、ただ波の音だけが静かに響き渡っている。その音は次第に大きくなっていき、やがて耳をつんざくような音量に達したとき、画面がブラックアウトするのと同時に消え去る。遠くから、今にもエンジンが息絶えそうな、旧式の赤い車がやってくる。ごくわずかに停車していた車が立ち去ると、そこには登山用よりは小さく、通学用よりは大きいバックパックを背負った若い男が残されている。男は幾秒か立ち尽くし、意を決したように歩き出す。

2○カフェー昼

男は、この荒れ果てた町に一軒しかないであろう、なんとも香ばしいカフェを見つける。ドアノブに手をやり、木造のドアを開けると、チリリンと音が鳴る。男は中へ入っていく。

3○カフェー昼

カウンターには、煙草を吸いながら黄ばんだファッション誌を興味なさそうにパラパラとめくる、トランス・ジェンダーの女がいる。男は女に目をやり、適当に席に座る。すると女は気怠そうに立ち上がり、男の元へやってくる。

トランス・ジェンダー女：
「オーダーは？」

男は、二十年前に作られたような年季の入ったメニューを指差す。

トランス・ジェンダー女：
「アメリカーノね。」

女はそう言い、メニューをさらってカウンターへと戻る。男が窓へ目をやると、遠景に腰の曲がった老人が杖をついて歩いているのが見える。室内に目を戻すと、男はバックパックから青くて薄い一冊の詩集を取り出す。

すると女がコーヒーを持って戻ってくる。女はコーヒーをテーブルに置きながら、

トランス・ジェンダー女：
「あ、これ知ってるわよ。この詩集ってここについて書いてんでしょ？」

そう言って男の向かいの席に座る。両肘をテーブルにつけ、組まれた指に顎を乗せて、前屈みで男に話しかける。

トランス・ジェンダー女：
「変な詩人よね。何でこんな潮風と小石しか無いような場所について書いたのかしら。」

そう言いながら女は男から詩集を奪い取り、興味なさそうにパラパラとめくる。女は再び話し始める。

トランス・ジェンダー女：
「あたし良いこと考えた！ あんたどうせ泊まるとこ無いんでしょ？ うちに来なさいよ。まぁちゃんといえば、うちの死んだばぁちゃんの家なんだけど。ばぁちゃんが死んでから、ずっとそのまんまになってんのよね。人情のない家族はみんな、フロリダだのホーチミンだのに消えてっちまって、私が唯一、真の愛ある身寄りだったんだけどねぇ。どうも片付けだけは性に合わなくて。家を片付けてくれる代わりにタダで泊めてあげるから。どぅ？ あんたにとっても良い条件でしょ？ ほら、着いてきなさいよ！」

そう言って、女は男の腕を掴み、半ば強引に外へ連れて行こうとする。男は慌てて自分のバックパックを掴み、引きづられるようにしてカフェを後にする。

4◦ばぁちゃんの家までの道 ― 昼

男と女の後ろ姿が見える。片腕を掴まれたままの男はようやくックパックを背負い、体勢を整える。女は、一方的に自分の身の上話を、身振り手振り話し続ける。

トランス・ジェンダー女：
「あたしゃ、ばぁちゃんにとって一番の孫だったんだ。いや、一番の家族だったね。じぃちゃんがとうの昔にさっさと逝っちまって、ばぁちゃんが一人だって言うのに、クソ父さんもクソ母さんも、一番目のバカ兄貴も二番目のバカ兄貴も誰も帰ってきやしない。絵葉書の一つ送りやしない。

だからあたし、腹たって七十八回ぐらい電話かけてやったんだよ。そしたら、あいつら根性負けしてようやく電話に出たけど、ホーチミンは深夜だからまた明日にしてくれって、とっとと電話切っちまったんだ。ホーチミンだかクアラルンプールだか知んないけど、まず一体全体あいつらはなんでそんな意味の分からない、地球の果てみたいなところにいるんだ？　まぁそれ以降音信不通って訳。ところであんた、ダナンって島知ってるか？　あたしゃ一度行ってみたくてね。なんだって一年中あったかくて、とんでもなく美しい海がある楽園のような場所らしい。ああ、こんな小石だらけの砂漠のようなところ、とっととおさらばしたいもんだよ。」

5○ばぁちゃんの家ー昼

男と女は、家の前に辿り着く。やはり木造の、小さな可愛らしい家だ。

トランス・ジェンダー女：
「さっ、ここだよ。入りな。」

そう言って、鍵を差し込みドアを開け、中へと入っていく女。男もそれに続く。

6○ばぁちゃんの家（居間）ー昼

何処もかしこにも雑然と物が置かれ、全てが薄く埃を被ったこの家は、確かに、誰かがこの場所で生活をしていたことが感じられる。そして、その瞬間がパチッと、そっくりそのまま時間を止めてしまったかのようだ。

トランス・ジェンダー女：
「はん？　よく整理された場所だろ？　片付けさえしといてくれれば、何でもいいから。じゃ、よろしくっ！」

そう言って女は家を出ていく。残された男は部屋を見て回る。綺麗にかつ、パンパンに吸い殻が詰められた灰皿。その隣には、小さなジュエリーボックスがあり、徐に開けてみると、中には青いダイアモンドのペンダントが収められている。さらにその隣には、両手を広げて天に向かって叫んでいるような、黄色いシリコン製の棒人間のオブジェがある。またさらにその隣には、複数の新聞紙が重ね置かれており、男が軽く埃を手で払うとその一面には、「ゲンズブール、病室で消臭しながら喫煙」という記事が見える。額縁に入れられた家族写真もやはりまた、埃を被っている。

7○ばぁちゃんの家（玄関、居間、寝室）―朝

トランス・ジェンダー女：

「朝ごはん… おおっ！すごい。信じらんないよ。」

そう言いながら、トレーに載せた朝食を持って現れた女。その声に男は驚いて目を覚ます。

トランス・ジェンダー女：

「ほら、こっちきな！朝食を用意して差し上げたわよ。」

男はやや不本意そうにベッドから起き上がり、居間へと向かう。

8○ばぁちゃんの家（居間）―朝

女は、テーブルに運んできた朝食を並べている。目玉焼きにソーセージ、ベイクドビーンズ、三角形にカットされた食パンといった典型的な西洋風の朝ごはんである。透明なグラスに注がれているのは牛乳だ。

トランス・ジェンダー女：

「さっ、お座りください。おはようございます。ご機嫌いかがですか。」

男は無表情のまま、女の問いには答えない。

トランス・ジェンダー女：

「んまっ、どうでもいいわ。食べましょ？」

そう言って朝食を食べ始めた女に促されるように、男も朝食に手をつける。

9○ばぁちゃんの家（居間）―朝

二人は朝食を今にも平らげようとしている。最後に、二人揃って牛乳の入ったグラスを煽ると、女のグラスの底には「I'M GAY」、男のグラスの底には「I'M VIRGIN」と書いてある。二人は顔を見合わせ、女は盛大に、男は控えめに吹き出すように笑い出した。

トランス・ジェンダー女：

「あんたホントに？正直知ってたけどね、アハハハハハ。」

男は不本意そうな表情を浮かべる。すると、思いついたように周囲を見回し、隣のキャビネットにあったペンを手に取る。指に唾をつけ、グラスの底にある「I'M VIRGIN」の文字を消し、何やら書きこんでいる。書き終えた男は、再びグラスに牛乳を注ぎ、それを煽って飲む。書かれていた文字は「THE BEST CATCH EVER」だ。女はそれを見るなり、同じように指に唾をつけ、グラスの底の文字を消し、新たな文字を書きこむ。再び注がれた牛乳を女もまた煽って飲むと、グラスの底に見えた文字は「WAIT HARDER」であった。やはり男は不本意そうな顔をしている。グラスの底で言い争いをする、彼らの楽しげな無言の会話は続く。

10。原子力発電所 ― 昼

男はやや俯き気味に、原子力発電所の脇道を何物にも目をくれずに直進する。男は身軽な装いで、昨日一瞥をくれた詩集だけを手にしている。

（マッチ・カット）

11。木装の道 ― 昼

木で舗装された道がある。男はその道をやはり俯き気味に、心ここに在らずといった様子で直進する。

（マッチ・カット）

12。空っぽの船 ― 昼

殺風景な陸地に、遠い昔に打ち上げられたような廃れた空っぽの船がある。男は変わらず、神妙にも気の抜けたようにも見える表情で、その前を通過する。しかし、一度は見向きもせずにこの船の前を通り過ぎた男であったが、突然歩みを止め、船の方へと引き返してくる。今度は、空っぽの船をその目に捉えながら、ゆっくりと近づいていく。

（フラッシュ・バック）

まるでパズルのようにひしめき合う、多くの高層ビルが見える。けたたましく鳴る車のクラクションの音や、すれ違う電車の音など都会の喧騒が聞こえる。

（カット・バック）

男は、恐る恐る船に触れる。すると、なんだか受け入れられた気でもしたのだろうか、そのまま表面を指先でなぞりながら、ゆっくりと船の周りを歩き出す。

13◦空っぽの船 ― 昼

どれほど時間が経ったのだろうか。陽の差しが低くなっている。男が船に背を預け、体育座りをしながらぼんやりと前方を見つめていると、遠くから「おぉぉぉぉーい！」という声が聞こえてくる。男が声のする方へ目をやると、そこには世話になっているあの女がいる。女は男の元へ辿り着くと、男の隣で腕を組んで船に寄りかかる。

トランス・ジェンダー女：
「いつからここにいるんだい？」

男はその質問に答える代わりに肩をすくめる。

トランス・ジェンダー女：
「分かるよ、ここは気味の悪い町だよ。植物は乾燥で自生できないから背の高い木も草も無いし、何でもかんでも潮風のせいで錆びついちまってる。まるで砂のない砂漠みたいなもんだよ。でも知ってるか？ 誰かがあの電子力発電所のライトを見て、この町は『オズの魔法使い』のエメラルドシティみたいだって言ったんだ。ちっちゃい奴らの思い込みによって作られた虚構の王国だってさ、フッ。（鼻で笑う）さっ、あたしゃ帰るよ。あんたもこんなところでボケッとしてないで帰ろう。」

そう言われた男は立ち上がり、二人は家へと帰っていく。

14◦ばぁちゃんの家（テラス） ― 夜

辺りは真っ暗になっており、月明かりの下、男は詩集をゆらゆらと眺めている。しばらくすると、男は何かに誘われるようにして詩集を閉じて立ち上がり、どこかへと向かって歩き出す。

15◦海までの道 ― 夜

男は詩集を片手に、ゆらゆらと月夜を歩いている。その後景には、天使のような翼を背に携えた小さな子供がいる。しかし、男の目がその天使を捉えることはない。

16◦海―夜

やはり男はどこか危なげに、月明かりに照らされた夜道を歩いている。徐々に波の音が聞こえてくる。

（フラッシュ・バック）
再び、ひしめき合う高層ビルのイメージが現れる。都会の喧騒もまた、心なしかけたたましさを増して聞こえてくる。

（カット・バック）
男は海に辿り着く。波打ち際へと向かった男は、踏み締めるように海水に足を晒していると、「あっ」と声にならないような声を上げ、自身の足の裏を確認する。どうやら、小さな蟹に足の裏を噛まれたようだ。彼の足裏からはごく細く血が流れている。この様子もまた、先ほどの天使に見守られている。天使は、海岸に打ち上げられた丸太に腰を下ろし、遠くから静かに一部始終を見つめている。

17◦ばぁちゃんの家（寝室）―朝

ベッドで眠っていた男は目を覚ます。すると、すぐ隣でいつもの女が男の顔を覗き込むようにしているのに気がつき、驚いて跳ね起きる。

トランス・ジェンダー女：
「ハッハー！ あんた悪い夢で見てたんかい？ 芋を食べすぎたイモムシみたいな顔してたよ。まぁいい、さっ行くよ。」

そう言って、女は男をベットから引きづりおろし、椅子にかかっていた服を投げ付け、身支度を急かす。

18◦海―昼

二人は、昨夜男が訪れた海辺を、釣り道具を担ぎながら歩いている。女は、昨日店に来た二枚目男の話をするが、男はいつも通り女の話に反応することはない。二人は波打ち際にたどり着き、ひっくり返したバケツを椅子代わりに、早速釣りを始める。

トランス・ジェンダー女：

「釣りっていうのはね、海よりも広い心を持ってドンっと構えなきゃいけないのよ。始めてすぐ魚がかかることなんてまずないんだから…　ハアアアア？！」

女がそう話しているうちに早速、男の竿に魚がかかったようだ。竿は、海にいる何物かに強く引かれている。

（フラッシュ・バック）

また再び、窮屈にひしめき合う高層ビルのイメージが現れる。通話をしながら足早に歩くスーツ姿のサラリーマンや、テラス席で食事をするフェミニンに着飾った女たちなども遠巻きに見える。都会の喧騒は、一層けたたましさを増して聞こえてくる。

（カット・バック）

強く引かれていた竿がスッと、まるで何事もなかったかのような状態に戻った。魚が逃げてしまったようだ。

トランス・ジェンダー女：

「あんた何やってんのよ、全く意気地ないんだから。」

しかし、男の耳にはそんな言葉も全く届いていないようで、全身から血の気の引いた姿になった男は、フラフラと海辺を後にする。

トランス・ジェンダー女：

「ちょ、ちょっとあんた、どこ行くのよ！　ごめんって、あんたが小エビに負けたなんて誰にも言わないから！」

気がつくと、昨日の天使は女の隣でしゃがんで、やはり男のことを見つめている。

１９◦空っぽの船―夕暮れ

男は、例の空っぽの船の中で仰向けに寝転んでいる。波音と同時に、なぜか都会の喧騒も聞こえてくる。男は、空虚さと強い意志が混在したような奇妙な目つきをしている。

２０◦海―夜

男は一人、また海辺に戻ってきた。波打ち際で靴を脱ぎ、靴下を脱ぎ、足を海水にさらす。海の奥へ行ってしまおうという意志のあるような一

歩踏み出すも、その時、月光を反射させた真っ黒な海を目する。月の光を纏ったその海は、邪悪な黒々しさの中に小さな星のような輝きを混在させており、この光景に男は息を呑む。彼の頬は、涙で湿っているようにも見える。やはり気がつくと、いつもの天使が男の隣に立っている。

21。海―朝焼け

夜が明けようとしている。どうやら、男は海辺で夜を越したらしい。地面に倒れるようにして寝てる男には、なぜかグレーのブランケットがかけられている。すると、どこからか陽気な音楽が聞こえてくる。少し離れた所で、大勢の人が宴を開いているようだ。目を覚ました男は起き上がると、裸足でその宴に向かって歩き出す。

21。宴―朝

宴では、老若男女がカラフルなドレスやスーツを纏って、荒唐無稽に踊り狂っている。その中には、いつものトランスジェンダー女の姿も見える。彼らに入り混じるようにして、トランペットや小太鼓など様々な楽器を率いる音楽隊は、踊るように演奏をしている。長テーブルには、ワインボトルやシャンパングラス、豪勢な料理が所狭しと並べられており、それらは人々の興奮で今にもなぎ倒されそうである。宴の様子は、しばしアイレベルで捉えられた後、徐々に俯瞰の視点へと変化していき、やがてその様子は遥か遠くの地上のものとなる。

完